

## 特集

### 座談会「日本におけるアカデミズムの哲学史——『哲学雑誌』と『哲学研究』の比較分析」

（この座談会は、京都大学大学院文学研究科の日本哲学史研究室が主催する定期講演会、「日本哲学史フォーラム」の第三十六回会合として、二〇一九年四月十三日に京都大学の国際科学イノベーション棟で開催された。）

## 趣旨説明

上 原 麻有子

第三十六回日本哲学史フォーラムを開催いたします。今回のフォーラムは「日本におけるアカデミズムの哲学史——『哲学雑誌』と『哲学研究』の比較分析」と題して、座談会形式でお届けします。本日は、東京大学の鈴木泉先生、納富信留先生を、そして京都大学をご退職になられた藤田正勝先生をお招きしております。

この座談会は、三つの事情がきっかけとなり発案されました。まず、「京都学派」に対して「東京学派」という呼び方を聞くようになりましたが、東京大学縁の一連の哲学をまとめて「学派」と考えることは可能なのかと問い、そしてこれを「京都学派」と比較してみる意義はあると考えたこと。これが一つめです。二つめは、京都大学における哲学の発展と深いかかわりのある雑誌が『哲学研究』なのですが、この雑誌自体の歴史を見直す必要が出てきたという事情です。そして三つめですが、ちょうどそのような折に、鈴木泉先生から、東京大学で『哲学雑

誌』のアーカイブ化を進め、東京大学の哲学の歴史を見直すという研究プロジェクトが始まるということを伺いました。以上のような三つの事情が重なり、東大―京大が一緒に、近代に始まる哲学史をたどり直すという企画がまとまったのです。

今回の座談会は、『哲学研究』第六百号記念特集号に掲載された「座談会 京都の哲学と『哲学研究』を下地としています。これは、オーディエンスなしの座談会でした。そこではまだ明らかにされなかつたことを、今回もう少し検討してみたいという意図があります。では、過去の『哲学研究』をめぐる座談会の内容を簡単に振り返っておきましょう。

まずこの雑誌は、これからレビューする研究者に発表の場を提供するという意図により作られた、つまり「手習い草紙」であつた。これは、実際、若い研究者のみならず、西田幾多郎や田辺元などの「時代を画する研究」を発表した哲学者にとつても同じでした。ですので、掲載された多くの論文は、完全なものというより、次々と研究を進めながら、そのプロセスを見せるような書き方がなされていたということです。これが本誌の一つの特徴である。このようなことが、話題として出されました。それからもう一つは、当時の京都大学の哲学者たちの気風として *Selbstdenken* ということがあり、その書き方、研究の仕方は、『哲学研究』に掲載された論文に反映されていた、そして、彼らは論文を通して相互に批判し、切磋琢磨した、というようなことでした。

その折、東京の『哲学雑誌』はどうなつていたのかということも問われましたが、座談者の中に東京大学の方がいらつしやいませんでした。今回は是非ご一緒に、二つの雑誌を通して哲学の歴史を振り返つてみたいと思えます。本日は、特に『哲学雑誌』がどのようなものであつたのかを問う、こちらの方により焦点を当てて、鈴木先生と納富先生から、その辺りについでご説明いただき、藤田先生とともに二つの雑誌を比較してゆくことになります。そして、日本におけるアカデミズムの哲学研究がどのように発展したのか、いくらかでも明かにすることがで

きるのではないかと期待しております。

これから三人の先生方のご報告を拝聴しました後、私からも一つ報告をさせて頂きます。続いて四人の座談会へと移りまして、その後、会場の皆様とともに議論を進めてゆきたいと思えます。

\*鈴木先生によるご報告の内容は、「哲学会」と『哲学雑誌』をめぐる科研費研究プロジェクトの概要のご紹介でした。今号には掲載させていただいておりませんが、URLから本研究のプロジェクト概要、および現時点での研究成果の一部をご参照いただけます。

<http://www1.u-tokyo.ac.jp/philosophy/seika.html>

(筆者 うえはら・まゆこ 京都大学大学院文学研究科教授／日本哲学)